令 和 5 （2023）年 度

一般選抜公立大学中期日程（福祉情報学部） 試験問題

小論文

注 意 事 項

1　試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないで下さい。

2　解答はすべて解答用紙に記入して下さい。

3　解答には鉛筆かシャープペンシルを使用して下さい。

4　問題は全部で６ページあります。

5　試験時間は９０分です。

6　試験終了後、問題冊子も回収します。

7　何か伝えたいことがあるときは挙手して下さい。

第1問　次の文章を読んで、下記の問に答えなさい。

イギリス19世紀の小説家にウォルター・スコットという人がいる。すぐれた歴史小説を書いて、文学史上、有名である。

このスコットは寝て考えるタイプであったようだ。やっかいな問題がおこる。どうしたらいいだろう、などという話になると、彼はきまってこう言ったものだ、という。

「いや、くよくよすることはないさ。明日の朝、7時には解決しているよ」。

いまここで議論するより、ひと晩寝て、目をさましてみれば、自然に、おちつくところへおちついている、ということを経験で知っていたからであろう。

朝の頭を信頼し、朝の思想に期待していたことになるが、これは何もスコットに限ったことではなさそうである。その証拠に、英語には「一晩寝て考える」(sleep over)という成句もある。朝になって浮ぶ考えがすぐれていることを、多くの人々が知っていたのだと思われる。

ガウスという大数学者がいた。ある発見をした記録の表紙に〝1835年1月23日、朝7時、起床前に発見〟などと書き入れた。「一晩寝て考えた」あるいは「いく晩も寝て考えた」ことが、朝になっておどり出たのであろうか。

ヘルムホルツも大科学者であったが、朝、目をさますと、そのとたんにすばらしい考えが浮んだ、と語っているそうだ。

このような例を見てくると、発見は朝を好むらしい、ことがわかる。

〝三上〟という語がある。その昔、中国に欧陽修という人が、文章を作るときに、すぐれた考えがよく浮ぶ3つの場所として、馬上、枕上、厠上をあげた。これが三上である。この枕上というのは、普通は、夜、床に入ってからの時間のように考えられるが、そうではなく、朝、目をさましてから、起き上がるまでの時間ととれば、スコットも、ガウスも、ヘルムホルツも、枕上の実践家だったことになる。

だいたい、夜、寝る前に、あまり深刻なことを考えるのは良くない。寝つきを妨げる。眠ろうとすると、かえって、あとからあとからいろいろなことが頭に浮かんでくる。こういうときに、妙案があらわれるのは難しい。

寝る前には、あまり、おもしろい本を読むのも考えものである。いつまでも刺激が尾を引く。心が高ぶって、寝つきが悪い。おそくなってから、コーヒーや紅茶を飲むのはいけないのは知っているのに、興奮するような本を平気で読んでいる人がいる。なるべく、頭を騒がせないことだ。そして、朝を待つ。

枕上も、夜の時間ではなく、朝の枕上だと解したい。われわれの多くは、この朝のひとときをほとんど活用しないでいるのではあるまいか。いやしくも、ものを考えようとするのであれば、目をさましてから、床を離れるまでの時間は聖なる思いに心をこらすことを心掛けるべきであろう。

そのためには、タネがいる。ぼんやりしていたのでは、何も生まれない。考えごとがあるから、着想が出てくる。

どうして、「一晩寝て」からいい考えが浮ぶのか、よくわからない。ただ、どうやら、問題から答が出るまでには時間がかかるということらしい。その間、ずっと考え続けていてはかえってよろしくない。しばらくそっとしておく。すると、考えが凝固する。それには夜寝ている時間がいいのであろう。

よく、〝朝から晩まで、ずっと考え続けた〟というようなことを言う人がある。いかにもよく考えたようだが、その実は、すっきりした見方ができなくなってしまっていることが多い。こだわりができる。大局を見失って、枝葉に走って混乱することになりかねない。

前にも引き合いに出したが、外国に、

〝見つめるナベは煮えない〟

ということわざがある。早く煮えないか、早く煮えないか、とたえずナベのフタをとっていては、いつまでたっても煮えない。あまり注意しすぎては、かえって、結果がよろしくない。しばらくは放っておく時間が必要だということを教えたものである。

考えるときも同じことが言えそうだ。あまり考えつめては、問題の方がひっこんでしまう。出るべき芽も出られない。一晩寝てからだと、ナベの中はほどよく煮えているというのであろう。枕上の妙、ここにありというわけである。

ことと次第によっては、一晩では、短かすぎる場合がある。大きな問題なら、むしろ、長い間、寝させておかないと、解決に至らない。考えだして、すぐ答の出るようなものは、たいした問題ではないのである。本当の大問題は、長い間、心の中であたためておかないと、形をなさない。

W・W・ロストウはアメリカの経済学者で、ケネディ大統領の経済顧問として世界的に知られた人で、その「経済伸長論」は画期的な学説として高く評価された。その序論を読むとこの問題にはじめて関心をいだいたのは、ハーバードの学生としてであったと、書いてある。それから何十年もの歳月が流れている。忙しかったから、まとめるのが遅れたなどということではない。いつも、心にはあった。あたためていたのである。それがようやく、卵からかえったのである。こういうように、大問題はヒナにかえるまでに、長い歳月のかかることがある。

ロストウにしても、この理論にだけかかわっていたのではなかろう。ほかのことを考えることもあったに違いない。それは怠けていたのではない。時間を与えていたのである。〝見つめるナベ〟にしていたら、案外、途中で興味を失ってしまっていたかもしれない。

このごろはすくなくなったが、昔は、ひとつの小さな特殊問題を専心研究するという篤学の人がよくいたものである。わき目もふらず、ひとつのことに打ち込む。研究者にとって王道を歩んでいるようだが、その割には効果のあがらないことがしばしばである。

やはり、ナベを見つめすぎるからであろう。ナベにも煮えるのに自由な時間を与えなくてはいけない。あたため、寝させる必要がある。思考の整理法としては、寝させるほど大切なことはない。思考を生み出すのにも、寝させるのが必須である。

作家にとってもっともよい素材は幼少年時代の経験であると言われる。幼いころのこと

をもとにして書かれた、幼年物語、少年物語、そういう名はついていなくても、そういう性格の作品が、すぐれていない作家は凡庸であるとしてよい。

なぜ、作家の幼年、少年物語にすぐれたものが多いのか。素材が充分、寝させてあるからだろう。結晶になっているからである。余計なものは時の流れに洗われて風化してしまっている。長い間、心の中であたためられていたものには不思議な力がある。寝させていたテーマは、目をさますと、たいへんな活動をする。なにごともむやみと急いではいけない。人間には意志の力だけではどうにもならないことがある。それは時間が自然のうちに、意識を超えたところで、おちつくところへおちつかせてくれるのである。

努力をすれば、どんなことでも成就するように考えるのは思い上がりである。努力しても、できないことがある。それには、時間をかけるしか手がない。幸運は寝て待つのが賢明である。ときとして、一夜漬けのようにさっとでき上がることもあれば、何十年という沈潜ののちに、はじめて、形をととのえるということもある。いずれにしても、こういう無意識の時間を使って、考えを生み出すということに、われわれはもっと関心をいだくべきである。

出典：外山滋比古『思考の生理学』ちくま文庫、1986 年、36-41 頁

問 1　筆者が「枕上」を夜の時間ではなく、朝の枕上だと解したい理由について 300 字以内で説明しなさい。

問 2　無意識の時間を使って、考えを生み出すことについて、あなたの考えを 500 字以内で述べなさい。

第２問　次の問いに答えよ。

問１　図１は、平成 24 年度から令和２年度までの全年代における主なメディアの平均利用時間の推移である。この図から読み取れることと、そのような状況になった理由について、あなたが考えることを 200 字程度で述べよ。

問２　図２を見て、年代別の主なメディアの平均利用時間について読み取れることと、そのような状況になった理由について、あなたが考えることを 200 字程度で述べよ。

問３　図３を見てあなたが気付いたことと、そのような状況になった理由について、あなたが考えることを、図１および図２から読み取れることをふまえ 300 字程度で述べよ。

問４　図４を見てあなたが気付いたことと、図 1～3 から読み取れることをふまえ、あなたが考える将来の展望について 300 字程度で述べよ。

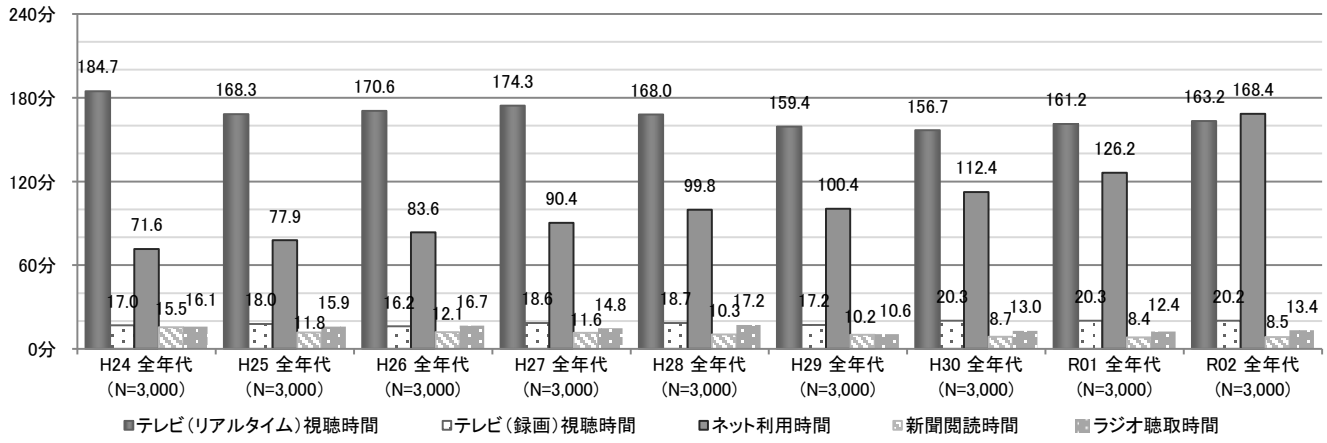


図１　主なメディアの平均利用時間（平日、全年代、経年）
（出典：総務省情報通信政策研究所「令和２年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」）

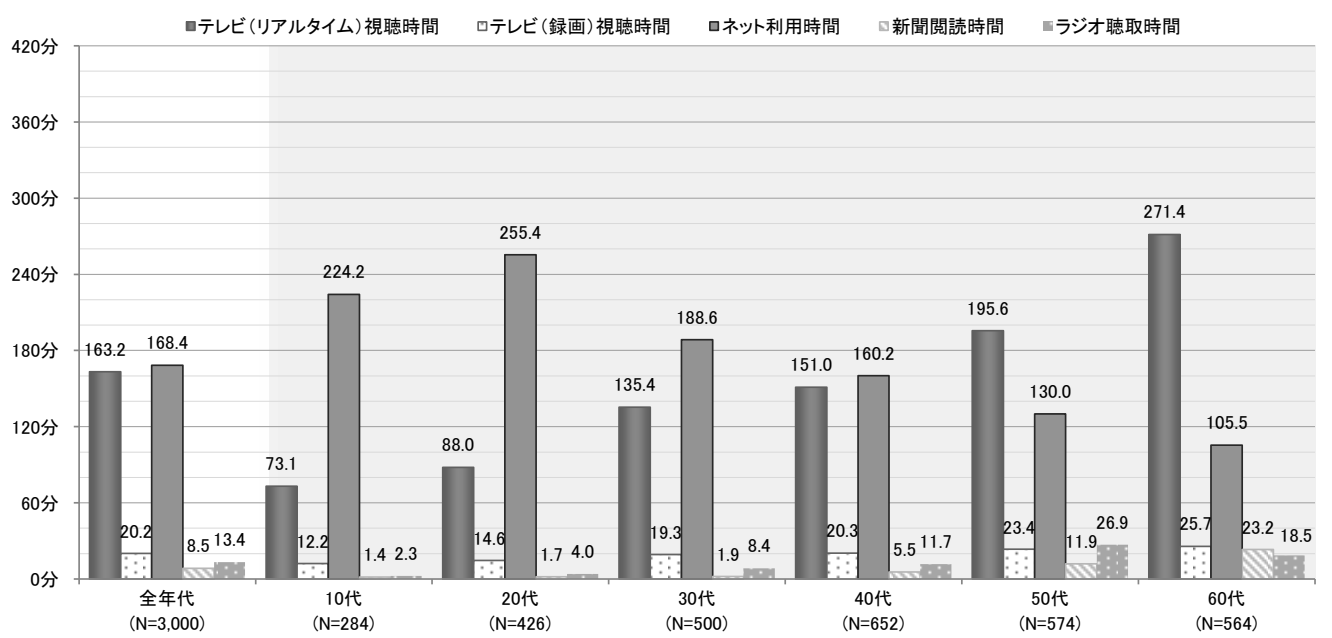
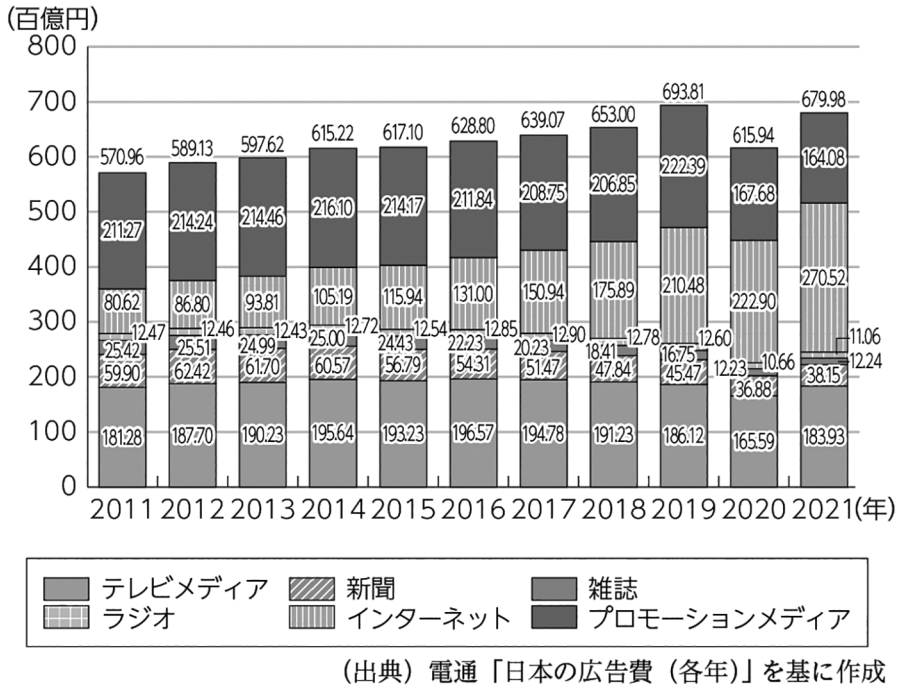


図２　主なメディアの平均利用時間（平日、全年代、年代別）（令和２年度）

（出典：総務省情報通信政策研究所「令和２年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」）

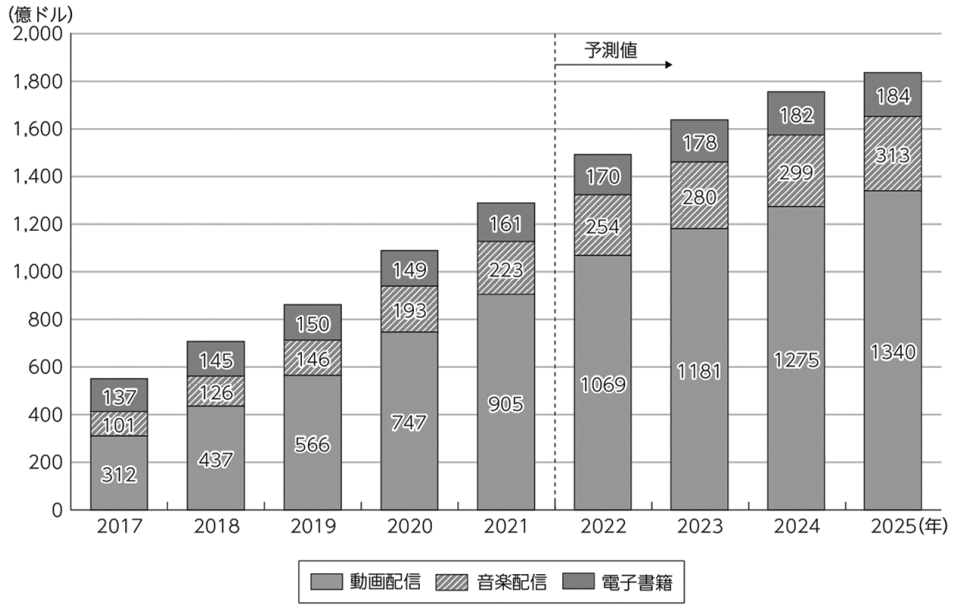


(出典) 電通「日本の広告費（各年）」を基に作成

図３　日本の媒体別広告費の推移

（出典：総務省令和４年版情報通信白書

https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r04/pdf/n3300000.pdf）



(出典) Omdia、Statista「Digital Market Outlook」

図４　世界の動画配信・音楽配信・電子書籍の市場規模の推移及び予測
（出典：総務省令和４年版情報通信白書
https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r04/pdf/n3600000.pdf）